



## 町田章所長 中国社会科学院名誉教授称号授与

去る11月3日、北京の中国社会科学院学術報告庁において標記授与式がおこなわれました。中国社会科学院の歴史考古部門では国内外を問わず町田所長が最初の受賞者であり、大変名誉なことです。授与式では、中国社会科学院考古研究所副所長白雲翔氏が司会を務め、まず町田所長の経歴紹介があり、続いて劉慶柱考古研究所長の推薦の事由説明がおこなわれました。劉所長があげた推薦の理由は3つあり、最大の理由は、町田所長がこれまでおこなってきた中国考古学研究成果が、中国においても極めて高い評価を受けている事です。また後で詳しく述べますが1985年以来、中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所との共同研究を町田所長が積極的に推進し、華々しい共同研究成果を達成したことです。更に、町田所長がユネスコの世界文化遺産保護機構の参与として新疆ウイグル自治区交河故城、陝西省唐長安城大明宮含元殿の指定に尽力したことです。この後、中国社会科学院副院長王洛林氏から証書が授与され、中国社会科学院合作局副局長李薇女史、中国文物研究所長吳加安氏、北京大学考古文博院長高嵩文氏から祝辞を賜りました。これに対し町田所長から受賞理由の一つである中国社会科学



名誉教授授与の風景

学院考古研究所との共同研究は、鈴木嘉吉元所長、田中塚前所長を始めとする先輩諸氏、研究員の努力のたまものであり、名誉教授称号は研究所を代表して拝受しますと述べました。授賞式終了後、町田所長による受賞記念学術講演会があり、最近話題になった加速器質量分析法（AMS）による炭素14年代測定で提示された弥生時代早期・前期の新しい年代観に対し、当研究所の光谷拓実室長がおこなっている年輪年代法の成果を踏まえ、中国・韓国の文化内容と弥生文化を対比しながら、新たな所見を発表しました。中国考古学界でも注目されているテーマであり、好評を博しました。

### 中国社会科学院考古研究所との共同研究

1985年6月、坪井清足元所長を団長とする奈文研代表団が中国社会科学院考古研究所を訪問したのが交流の始まりです。1991年6月には、両研究所は、5カ年計画の「友好共同研究議定書」を調印し、「日本古代都城と中国都城との考古学比較研究」を研究課題とする共同研究が始まりました。毎年、研究員を相互に派遣し、学術交流を図り、研究報告会等を開催しました。1992年秋には、洛陽城の白居易邸の発掘調査に、1994年秋から冬にかけては北魏洛陽永寧寺の発掘調査に参加しました。

協定期間が過ぎた1996年6月、都城の共同発掘調査を眼目とする第2次「友好共同研究議定書」を交わしました。この年には漢長安城の宮殿発掘調査を計画し、発掘届を国家文物局に提出しましたが、中国側の事情で年内の調査は実現できませんでした。翌年から2000年度までの間、武帝が后妃のために造営した宮殿である桂宮の共同発掘調査を実施し、現在、双方で報告書を作成しています。

2001年度には、第3次「友好共同研究議定書」を新たに調印し、5カ年計画で唐長安城大明宮太液池の共同発掘調査を実施しているところです。

（埋蔵文化財センター 巽淳一郎）

## ✿ 発掘調査の概要

### 石神遺跡の調査（飛鳥藤原第 129 次）

今回の調査は、石神遺跡の第 16 次調査です。約 700 m<sup>2</sup>で、7 月から夏の現場班が調査を開始し、10 月になって秋の現場班が引き継いで調査しています。

石神遺跡の施設群の北限から 2 枚北の水田。調査区周辺の水田の中の等高線をたどると、谷間になっており、とにかく湧水が多い。10 月に入って、稲刈りを控えた水田では水が抜け、状況は良くなりました。それでも雨の翌日にはどうしようかと思うほどグチャグチャの現場。作業員からは、「こんな汁い現場はかなわん」との声……。

それでも昨年の調査で検出した天武朝の溝や藤原宮期の溝の延長などを検出しました。それらの溝の堆積土や埋め立てた整地土の中からは、多数の遺物が出土しました。金属製品では銅製人形<sup>ひとがた</sup>。木製品では鋤（一木造り）、下駄、齋串、琴柱、漆器、曲物、栓<sup>さし</sup>、匙<sup>こま</sup>、独染、糸巻、罫線を引くための定規。土器・土製品では土師器、須恵器、埴塙、土馬、円面硯、<sup>もの</sup>「物部連」<sup>ものべのむらじ</sup>、「五十上」と記した墨書土器。出土した木簡の多くは荷札木簡で、「三川国」など各地の地名を記したものや、「己卯年」（天武天皇 8 年、679）や「壬辰年」（持統天皇 6 年、692）の年紀のあるものがあります。また、税制度にかかわるもの、『論語』の「朋有り遠方より来たる」の部分を書いた木簡もありました。有名な一節であるだけに、当時書いた人に親近感を覚えました。

11 月 22 日には現地説明会をおこないました。前日までとはうってかわって寒くなりましたが、約

600 名の参加がありました。当日は内田が遺跡の概要と検出遺構を説明し、市大樹が出土した木簡の釈文などを説明しました。また、竹内亮が定規の模型を使って紙面の余白の取り方や等間隔で罫線を引く方法を実演し、大変好評でした。現地説明会資料はカラーのものを印刷することができ、石神遺跡の概要も記すことができたので、少しでも多くの人に石神遺跡を理解して頂ければ幸いです。年末までを目標に調査は継続しています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 内田和伸）



調査風景（南西から）



現地説明会の風景（後方左が耳成山）

### 旧大乘院庭園の調査（平城第 365 次）

興福寺の南方、現在奈良ホテルが建つ朝香山の南麓に、旧大乘院庭園があります。大乘院は興福寺の門跡寺院で、その庭園は室町時代の尋尊大僧正による修築後、改修を経ながら江戸時代末に至るまで南都随一の名園として栄えました。今回の調査は、庭園の中心に位置する東大池の西北隅と西南隅を対象に、10月から開始し、現在も継続中です。

このうち西南隅の調査区からは意外なものが出土しています。近代土管の初出とされる陶管で、大乘院の池水を外へくばる暗渠に用いられていました。この陶管は、明治5年（1872年）、愛知県常滑の製陶業者・鯉江方寿が、お雇い外国人・R.H.プラントンの依頼により、横浜居留地の下水道用につくったものです。しかし納入後、規格外とされて全数不合格となり、地元の資材商に払い下げられてしまいました。東京の新橋停車場跡地からはこの陶管がまとまって出土しており、近隣の土木工事にすぐに流用された様子うかがえます。一方、鯉江方寿は陶管の改良にとりかかり、翌年には新型の陶管を開発、これが全国へ普及する近代土管の原形となりました。

このように、この陶管は近代土管の試作品ともいえるもので、その使用は、本格的な近代土管が普及する以前の明治5年から数年の間と推察できます。この陶管がどのような経緯で大乘院に持ち込まれたのかはわかりませんが、明治時代末期に国有鉄道法により、偶然にも大乘院が新橋停車場の所有者であった鉄道院（現在のJR）の所有となることと、不思議な縁を感じずにはいられません。

調査は12月末まで継続する予定です。調査終了後には、あらためて調査の全容を報告したいと思います。（平城宮跡発掘調査部 金井 健）



横浜居留地下水道用の陶管を用いた暗渠（西南から）

### 法華寺境内の調査（平城第 363 次）

平城宮の東側に隣接する法華寺では、新たに防災施設を敷設するために、事前調査として8月より発掘をおこなっています。調査区が境内をほぼ全周するかたちでめぐっているため、調査開始より4ヶ月たった今でも調査が続いています。

調査区の幅が1mと狭いため、遺構の状況がわかる範囲も限られていますが、それでも興味深い成果があげられつつあります。

例えば、本堂の北東にある光月亭の周囲では、かつて建てられていた建物の基壇が見つかりました。この基壇の時期は中～近世と考えられます。

また本堂と鐘楼の間では、近世の池の痕跡が検出されたほか、建物の柱根が2本も検出されました。いずれも直径60cm近い立派なものです。これらの柱根の位置から、かつてこの場所に南北4間、東西7間の建物が建てられていたことがわかりました。ただし、この建物の時期についてはよくわかりません。

11月以降は本堂の南面や、鐘楼周辺の調査になりますが、本堂の南面にもかつて建物が存在していたことがわかっていますので、今後の調査で新たな情報が得られることが期待されます。

（平城宮跡発掘調査部 林 正憲）



調査区全景（左下が柱穴）



外面 (原寸)

## 猿の墨画土器

土師器の皿の外面に5匹の猿、内面に犬の顔らしきものが描かれています。長屋王邸の東外郭にある井戸に投げ込まれたもので、長屋王（676? ~ 729年）存命中のものと思われます。専門絵師の下絵と考えられ、猿を描いた日本最古の墨画として、美術史的にも貴重な資料です。現在、平城宮跡資料館でレプリカを展示中です。

（平城宮跡発掘調査部 神野 恵）



内面（60%縮小）

## 川原寺鉄釜鑄造遺構復原模型の製作

2003年2月から7月末におこなった史跡「川原寺」地内北端の調査では、川原寺に付属する様々な工房関係の遺構や遺物を発見することができました。

その中でも調査区南半の丘陵裾で検出した鉄釜の鑄造遺構は、類例のない古代の大型鉄製品の鑄造遺構として大きな注目を集めました。鑄造遺構は直径2.8mの大型土坑で、その中央には鉄釜の鑄型が据えられた状態で遺存していました。

鑄型が鑄造時の状況をとどめて残るのはきわめてまれなことです。そこで鑄型の取り上げ作業にあわせて、出土状態を再現する模型を製作することにしました。

この作業には次のような制約がありました。まず第1に、鑄造遺構の下部構造の調査をおこなうため、遺構の損傷は許されません。第2に、鑄型は細かく

ひび割れていましたが、これを発見時の姿で取り上げなければなりません。このため、鑄型に強化剤を塗布して補強し、その後に遺構の表面を樹脂で型取り、鑄型の取り上げと同時に遺構の表面の土を剥ぎ取り、室内でこれらを組み立てることにしました。

こうしてできあがった出土状態の再現模型が、写真に見るような縦1.2m、横1.8mの模型で、実物の鑄型をはめこんだものです。鑄型の取り上げ後に、鑄造遺構の調査を継続しましたが、鑄造時に発生するガス抜きのための穴を四方に設けた特殊な基礎構造が明らかになり、古代の鑄鉄技術を解明する上で大変貴重な発見となりました。

復原模型は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部資料室に展示しています。ぜひ一度実物をご覧になり、古代の鑄造技術の一端に触れてみてはいかがでしょうか。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 渡部圭一郎)



## 研究室紹介

### 平城宮跡発掘調査部史料調査室

平城宮跡発掘調査部史料調査室は、平城宮・京の発掘調査で見つかる木簡の整理・解読、及び遺跡・遺物の文献史料からの検討を担当しています。今年5月に出土文字資料として初めて重要文化財に指定された大膳職推定地の木簡を初め、1961年に平城宮で最初の本簡が見つかった以来これまでに出土した平城宮の本簡は約5万点、長屋王家本簡・二条大路本簡という平城京内の二大本簡群を含めると、私たちが担当する本簡は17万点にも上ります。これらの本簡の一つひとつから最大限の情報を引き出して公開し、また本簡そのものをしっかりと守り後世に伝えていくのが史料調査室の責務です。いわば古代の証人である本簡の番人ともいえるでしょう。全国出土の本簡は25万点、その約7割を現在3人のスタッフで維持しています。いずれも文献史学（日本古代史）が専門で、発掘調査にも参加しています。

本簡は、たっぷりの地下水に保護されながら溝・井戸・土坑などの中で粘土や砂にパックされ、日光と空気から遮断された状態で初めて、1300年もの間腐らずに残ってきました。ですから、現場で文字があるのがわかって、炎天下で泥を落として文字を読むのは禁物です。整理室に持ち帰って筆や竹串を使って慎重に泥にまみれた本簡を洗うのです。

ところで、本簡を使う利点の一つは、何度も削り直して再利用できることで、削り取られたカンナ屑状の細片に文字が残ることがあります。これを削屑けずくずと呼びます。削屑や破片の現場での選別は不可能なので、土ごと整理室に持ち帰って洗浄します。微細な断片も逃さぬよう、ふるいの上で土の塊を手にとって、少しずつ丁寧に泥を落としていきます。長屋王家本簡や二条大路本簡が出土した時には、コンテナ1万箱分の土を、実に5年半かけて洗いました。

本簡を読む最も基礎的な作業は、本簡を肉眼でじっくり観察してスケッチすることです。私たちはこれを「記帳」と呼びます。水の中で本簡を少し傾けると、光の屈折の関係で墨痕が見やすくなります。微妙な筆の動きを漏れなく観察して記録します。記帳は本簡を読む作業の基本中の基本で、微細な削屑も1点1点記録します。文字の残りが悪い場合には、赤外線テレビカメラ装置も有効です。墨は赤外線を

吸収するので、墨の部分が強調され、また木目の情報が捨象しゃしょうされて見やすくなるのです。

記帳が終わると、専門のスタッフによる写真撮影です。本簡のようなコントラストの弱い文字を鮮やかに出すのは至難の業です。原寸大の焼付けを作り、本簡1点ごとに台紙に貼って研究用資料とします。

読みが確定したら、主な本簡を『平城宮発掘調査出土本簡概報』（既刊37冊）として公表します。最終的には、一文字でも読めるもの全ての鮮明な写真図版と釈文（解説付）を収めた『平城宮本簡』（既刊5冊）、『平城京本簡』（既刊2冊）という正報告書として結実します。その後本簡は科学的に保存処理を行います。それまでは水（防腐剤としてのホウ酸・ホウ砂の薄い水溶液）に漬けた状態で、温度湿度の変化の少ない収蔵庫に保管しています。ただ、水の減り具合や汚れ具合のチェックは欠かせません。脆弱な遺物の管理には細心の注意が必要です。

こうして私たちが解読した本簡のデータは、奈文研のホームページでも、本簡データベースとして画像とともに公開しています。ここには本簡学会の協力で、全国出土の本簡のデータも入っていて、全国の本簡を一文字単位で検索することができます。

なお、私たちは42年間培ってきた本簡の文字を読むノウハウを、できるだけ学界共有の財産として生かしていければと考えています。現在日本学術振興会から科学研究費補助金をいただいて「本簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」という5カ年計画のプロジェクトを所外の先生方のご協力もいただきながら進めています。本簡解読技術を蓄積し、より客観的な検証可能なシステムとして提供したいというのがこの研究の主旨で、数年後にはより豊かな古代の文字の世界をみなさんにお見せすることが可能になることでしょう。

（平城宮跡発掘調査部 渡邊晃宏）



本簡庫に眠る水漬け状態の本簡

## 飛鳥資料館のみどころ (3)

飛鳥資料館では、地階にビデオコーナーを設置しています。この度、機器を一新するとともに、内容の拡充をおこないました。

これまでは、飛鳥時代の歴史を紹介したプロログ編である「遙かなる飛鳥の時代」(6分)、山田寺の歴史から東回廊の発掘調査とその意義について解説し



ビデオコーナー

た「山田寺東回廊」(9分)、須弥山石や亀石、猿石など飛鳥に残る石造物を紹介した「飛鳥の石造物」(6分)、飛鳥時代における古墳の変遷から艸墓古墳、天王山古墳について解説した「飛鳥の古墳」(6分)、飛鳥におかれた宮の構造とその変遷を紹介した「飛鳥の宮」(4分)の5本でした。

今回これに、高松塚古墳の発掘に参加した人々のエピソードを中心とした壁画発見までのドキュ

メンタリーである「高松塚古墳の歴史」(23分)、古墳の構造から出土品を解説した「高松塚古墳の構造・出土品」(11分)、壁画について解説した「高松塚古墳の壁画」(15分)、古墳の保存に関する歴史を紹介した「高松塚古墳の保存」(10分)の高松塚古墳に関する4本と、最新のデータを元に古代国家・飛鳥時代の歴史を詳しく解説した「飛鳥時代」(22分)を加えた計10本の構成となりました。

これらの映像をご覧いただくことで、飛鳥の散策がより一層充実したものとなり、館内の展示品とともに、飛鳥の歴史や文化財について理解するための一助となれば幸いです。

また、これらをDVDやビデオとして販売しています。詳しくは飛鳥資料館(電話0744-54-3561)までお問い合わせください。

(飛鳥資料館 西山和宏)

『飛鳥 その時代』

(「遙かなる飛鳥の時代」「山田寺東回廊」「飛鳥の石造物」「飛鳥の古墳」「飛鳥の宮」収録)

DVD ¥2,000

『高松塚古墳の歴史』

(「高松塚古墳の歴史」「高松塚古墳の構造・出土品」「高松塚古墳の壁画」「高松塚古墳の保存」収録)

ビデオ ¥2,000、DVD ¥3,000

## 記 録

### 速報展

発掘速報展「奈良の都を掘る 平城 2003」  
平成15年11月1日～21日平城宮跡資料館  
史跡川原寺寺域北限調査の成果速報展及び  
「古代飛鳥の模型」の展示

平成15年10月27日～2ヶ月間  
飛鳥藤原宮跡発掘調査部資料室

### 現地説明会

平城第365次(名勝旧大乘院庭園)発掘調査  
平成15年11月15日(土)午後1時30分～  
報告者:平城宮跡発掘調査部 金井 健 技官  
飛鳥藤原第129次(石神遺跡16次)発掘調査  
平成15年11月22日(土)午後1時30分～  
報告者:飛鳥藤原宮跡発掘調査部

内田和伸 主任研究官

### 埋蔵文化財発掘技術者研修

古代集落遺跡調査課程専門研修  
平成15年10月1日～10月10日 13名  
遺跡環境調査課程専門研修  
平成15年10月16日～10月31日 12名  
官衙遺跡調査課程専門研修  
平成15年11月27日～12月9日 13名  
遺跡地図情報課程特別研修  
平成15年11月11日～11月14日 24名

## 研究会

古代官衙・集落研究会  
平成15年12月12日(金)～13日(土)  
午後1時～翌午後3時  
平城宮跡資料館講堂

最近の本一所員編・著の刊行物から一

奈良文化財研究所編『奈良の寺 世界遺産を歩く』  
岩波書店

田中琢編『古都発掘 藤原京と平城京』  
岩波書店(2003年復刊)

小澤毅著『日本古代宮都構造の研究』 青木書店  
杉山洋著『唐式鏡の研究 飛鳥・奈良時代

金属器生産の諸問題』 鶴山堂

松井章編集・監修『考古学的研究法から見た木の  
文化・骨の文化』 クバプロ

松井章編『環境考古学マニュアル』 同成社  
沢田正昭編集・監修『遺物の保存と調査』クバプロ

村上隆著『金工技術』(日本の美術443) 至文堂  
清水重敦著『擬洋風建築』(日本の美術446) 至文堂

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2003年12月